

マジャパヒト号、那覇到着 古代の日伊交流を実証 豪雨と10メートルの高波乗り越え (2016年06月15日)

日本に向けジャカルタから航行中の「スピリット・オブ・マジャパヒト号」が12日、沖縄・那覇港に到着した。13日に港で歓迎式典があり、14日には宜野湾市内のホテルでマジャパヒト・琉球王朝交流再現式典が行われた。先月11日のジャカルタ出航から1カ月。全長20メートルの木造帆船は古代からあった日伊の交流を初めて実証した。

乗船した海洋冒険家、山本良行さん(67)とインドネシア人船員9人は全員元気で、歓迎式典で出迎えたインドネシア海事調整省副大臣、在日インドネシア大使館員、インドネシア・マジャパヒト・コミュニティ代表、沖縄インドネシア友好協会副会長らから、「よく頑張ってくれた」とねぎらいの言葉をかけられた。

マジャパヒト王朝は13～16世紀に栄え、琉球王朝と交流があった。マジャパヒト・琉球王朝交流再現式典では、古代の様式に従い、マジャパヒト・コミュニティのスマルウォト代表がマジャパヒト王朝特使役として、沖縄インドネシア友好協会の西平守樹会長が琉球王朝代表役に、それぞれふんし、クリス(古代ジャワの短剣)、バティック、丁子などインドネシア特産の香料を贈呈する儀式が行われた。式典は当初、那覇市内の首里城で行う予定だったが、大雨のため会場を宜野湾市に変更した。

スマルウォト代表は今回の航海の背景を説明し、「関係者に記念品を贈呈できたことを誇りに思う」と述べ、西平会長は「わざわざ日本まで帆船で来ていただき、誠にうれしく、感激している。いただいた贈呈品は大切に保管したい」と語った。

■「一時は死ぬかと」

山本さんはこれまで何度もインド洋や太平洋を航海しているが、那覇上陸後、「今回の航海は死ぬかと思った」と話した。

山本さんによると、ジャカルタからマニラ、台湾・高雄までの航海は順調だったが、台湾の北部沿岸航行中の8日、東シナ海の海流とぶつかり、天候は荒れてエンジンが過熱し、停止した。その後エンジン冷却装置が故障し、やっとの思いで修理した直後、梅雨前線の影響でいきなり竜巻が起き、豪雨に襲われた。北東から強い向かい風で波は10メートルを超えた。

那覇への直進を断念し、宮古島経由に進路を変え、高波を全面に受けながら、何とか進むことができたが、宮古島手前50マイル(約80キロ)地点で、風が変わった。11日、久米島経由で島の陰に隠れながら、沖縄に進路をとり、12日に那覇に到着できた。

山本さんは「10メートルを超える大波がこの船に何回も襲いかかったが、それに耐えたこ

とで、この船がいかに強靱（きょうじん）な構造か証明できた。非常に満足な気持ちである」と話していた。（濱田雄二）



那覇港に停泊中のマジャパヒト号



那覇港で海事調整省副大臣、沖縄インドネシア友好協会会員らから歓迎されるマジャパヒト号の乗組員



再現式典で贈呈品を引き渡すスマルウォット代表（左から2人目）、西平守樹会長（同4人目）と乗組員ら=いずれも高城芳秋さん提供

